

『高慢と偏見』のエリザベスの魅力

——ジェインとの比較において——

朱 雀 成 子

『高慢と偏見』の女主人公、エリザベス・ベネットは、多くの読者の心を捉え得る魅力的な女性として描写されている。その魅力は、作者のジェイン・オースティン自身

I must confess that I think her as delightful a creature as ever appeared in print, and how I shall be able to tolerate those who do not like her at least I do not know...⁽¹⁾

と告白するほどである。この論文では、エリザベスを姉のジェインと比較しながら、特に二人の人間観、恋愛観、結婚観を通じて、エリザベスの魅力を探ってみたい。

I

ジェインとエリザベスの人間観は、対照的である。ジェインは小説の中で終始一貫して人間性を信じ、誰の中にも欠点を見ようとしない。むしろ自分自身に対して批判的、内省的である。（今後、これを‘internal criticism’と呼ぶ。）一方、エリザベスはビングリーから「性格の研究家」「a studier of character」と言われる程に、自己の周囲の人々に旺盛な好奇心を抱き、それが多くの場合、他人に対して批判的な態度を取らしめる。

(1) J.E. Austen-leigh, *Memoir of Jane Austen* (Oxford Univ. Press, 1951), p.104.

(今後、これを ‘external criticism’ と呼ぶ。) 換言すればジェインの目には人間は皆、善人と映り、この世は心地よい場所と思える。

...all the world are good and agreeable in your eyes.(p.62.)⁽²⁾

一方、エリザベスは、この世での体験を重ねれば重ねるほど、人間に対する不信感が募り、人間に懐疑の目を向けざるを得ない。

There are few people whom I really love, and still fewer of whom I think well. The more I see of the world, the more am I dissatisfied with it; and every day confirms my belief of the inconsistency of all human characters, and of the little dependence that can be placed on the appearance of either merit or sense. (p.173.)

このエリザベスの持つ ‘external criticism’ とジェインの持つ ‘internal criticism’ を、我々は次の二、三の例に見ることができる。

第一は、ジェインの元を去りロンドンに行ったままのビングリーに対する二人の意見の相違である。ジェインは長い間、音信不通のビングリーを責めるところか、彼が彼女に示していた好意、もしくは愛を、彼女自身の「思いすぎし」「error of fancy,”あるいは「虚栄心」「vanity”に帰して、それが自分以外の誰をも傷つけなかったことを喜ぶ。

I have this comfort immediately, that it has not been more than an error of fancy on my side, and that it has done no harm to any one but myself. (p.173.)

ジェインのこの純粹さ、優しさは、エリザベスを感動させるが、しかし彼女は姉の人間観を認容するわけにはいかない。彼女はビングリーに好感を抱いてはいたが、彼の誠実さに懐疑の目を向けざるをえない。

(2) 以下引用は Tony Tanner 編のペンギン版による。

第二の例は、ビングリーの妹のミス・ビングリーに対する二人の見解の相違である。ジェインは、ミス・ビングリーが兄と自分との仲を裂こうとしたと主張するエリザベスに対して、「私は信じられないわ。あの方の心を皆で動かそうなんて、どうしてそんな必要があるの？あの人達の望んでいるのは、ビングリーさんの幸福だけでしょう？もしあの方が私に惹かれているのだったら、他の女性から幸福のえられるはずがないじゃないの。」³⁾と言う。しかしエリザベスは、ジェインの言う〈ビングリーの幸福〉という単純な発想に対して、ミス・ビングリーが兄とジェインの結婚を望まない種々の理由を推察しうる。たとえば、ミス・ビングリーは自分とダーシーとの結婚を優利にするために、兄にダーシーの妹と結婚してほしいとか、あるいは兄にジェインよりもっと富や家柄の良い家の娘を結婚相手に選択してほしい、などである。エリザベスには、現実的、利己的、そして誇り高いミス・ビングリーが兄とジェインの結婚に反対する動機が見抜ける。

これ以外にも、ジェインの底抜けの善良さを例示するものとして、たとえばジョージ・ウィカムの中傷によって、ダーシーがハーフォードシアの人々によって、「大悪人」「worst of men」と見なされるに至った時も、ジェインだけは、これには何か特別の理由があるに相違ないと信じているし、又、ウィカムの正体が暴露された時には、そのような悪の存在が信じられず、非常なショックを受ける程である。又、エリザベスの目には「うぬぼれが強く、高慢で、心の狭いバカな男」「a conceited, pompous, narrow-minded, silly man” (p.174.) 以外の何ものでもないコリンズ氏に対して、ジェインはシャーロット・ルーカスが彼を夫として選んだからには、何か美点を所有しているに相違ないと思っている。以上の様に、ジェインの性格の基調をなすものは‘internal criticism’であり、エリザベスのそれには、他人の言動を深く観察し、その性格を分析する‘external criticism’がある。

(3) “I cannot believe it. Why should they try to influence him? They can only wish his happiness, and if he is attached to me, no other woman can secure it.” (p.175.)

II

次にジェインとエリザベスを区別するものとして、Marvin Mudrick の言う〈単純な人間〉‘the simple’と〈複雑な人間〉‘the intricate’の分類がある。ジェインは、ベネット夫人、コリンズ氏、キャサリン夫人などと並んで〈単純な人間〉に分類されるが、一方、エリザベスは〈複雑な人間〉の代表である。確かにジェインは、数々の美点や長所にもかかわらず、その徹底した善良さは単純すぎる程で、我々に物足りない感を与えないでもない。エリザベスの方は、ビングリーとの対話の中で彼女自身「複雑な性格というのが、一番面白いですわ。それだけでも、得な人間なのですわ。」“...intricate characters are the most amusing. They have at least that advantage.” (p. 88.) と語るだけあって、彼女の性格は複雑であり、多面性を呈している。そして Tony Tanner が ‘But ‘intricate’ characters are capable of change, as both she and Darcy change.’⁽⁴⁾ と述べているように、複雑な人間であるエリザベスは、種々の出来事や人間に対して敏感に反応、対応し、そして変化していくのである。これはジェインの性格が終始一貫して小説中で変化しないのと対照的である。換言すれば、エリザベスの性格は動であり、ジェインのそれは〈静〉である。エリザベスは常に成長する人間として描写されている。このことを如実に示すのが、36章の彼女の自己認識の場面である。ここで彼女は、自分がダーシーとウィカムを他の人々と同様、appearance だけで判断してしまったことに気づく。人間を見る目を持っていると自負していた彼女も、ウィカムからはちやほやされ、ダーシーからは知り合った当初、ダンス・パーティーで無視されたことで、この二人の男性を世間一般の人々と同様に、単に appearance だけで判断し、ウィカムには好意を、ダーシーには偏見を抱いてしまう。洞察力のある彼女さえも appearance と reality を巡って、過ちを犯すのである。即ち彼女はその「虚栄心」“vanity” ゆえに、「盲目で、偏見持ちのバカな

(4) Jane Austen, *Pride and Prejudice*. ed. Tony Tanner (Penguin Books, 1980), p.30.

人間」“blind, partial, prejudiced, absurd” (p.124.) になっていたのである。
彼女の次の自己認識、自己発見の言葉は興味深い。

‘How despicably have I acted!’ She cried.—‘I, who have prided myself on my discernment!—I, who have valued myself on my abilities! who have often disdained the generous candour of my sister, and gratified my vanity, in useless or blameable distrust.—How humiliating is this discovery!—Yet, how just a humiliation!—Had I been in love, I could not have been more wretchedly blind. But vanity, not love, has been my folly. (p.236.)

そして彼女の「この瞬間まで、私は自分自身を知らなかった」“Till this moment, I never knew myself.” (p.237.) という自己発見の言葉は、彼女をして新しい方向に向かわせる。即ち、ダーシーへの偏見を捨て、彼に好意を抱き、やがて彼への愛に目覚める方向である。彼女はこのように自己の過ちに気づき、人間的に成長する。しかもこの事件を契機として、エリザベスは彼女の持ち前の ‘external criticism’ だけでなく、ジェインの持つ自己批判的な ‘internal criticism’ をも獲得する。

面白いことには、姉妹の〈単純な人間〉、〈複雑な人間〉としての相異なった性格は、そのまま彼らが選択した結婚相手にまで及んでいる。ビングリーはエリザベスやダーシーが何度か言及するように、比類のないほどの善人ではあるが〈単純な人間〉の部類に属する。ジェインの父親ベネット氏も、ビングリーとジェインの性格の類似を次のように指摘している。

Your tempers are by no means unlike. You are each of you so complying, that nothing will ever be resolved on; so easy, that every servant will cheat you; and so generous, that you will always exceed your income. (p.358.)

ダーシーは、Tonny Turner が ‘He is however capable of appreciating the intricacy of Elizabeth so that in effect he can rescue her from the incipient

claustrophobia of her life among simple people, and offer her more social and psychological space to move around in.’⁽⁵⁾ と指摘するように、エリザベスの複雑な性格を理解し得る唯一の相手として登場する。小説の中で変化、成長しないビングリーと対照的に、ダーシーはエリザベス同様、成長する人間である。エリザベスは、ダーシーのような男性を選んで初めて幸福になり得るわけで、彼との結婚によって彼女は面白くもない社会から逃避し、ダーシーの広大な邸宅ペムバレーで真の自由と幸福を獲得できるのである⁽⁶⁾。ビングリーの愛を得て、世界一幸せだと思ふジェインが、ビングリーの様な男性に妹も巡りあえたらと願った時、エリザベスは次の様に言う。

If you were to give me forty such men, I never could be so happy as you. Till I have your disposition, your goodness, I never can have your happiness. No, no, let me shift for myself; (p.359.)

この言葉はエリザベスが、〈単純な人間〉としてのジェインと、〈複雑な人間〉としての自分との相違を認識してのものと受けとめられよう。

III

「笑うことが大好き。」⁽⁷⁾ “I dearly love a laugh.” (p.102.) なエリザベスは、自分とジェインの性格の相違を ‘laugh’ と ‘smile’ という言葉で見事に表現している。ダーシーと結婚することになったエリザベスは、叔母のガードナー夫人に「わたしは世界一の仕合せものです。同じことを言った人は、ほかにも沢山いるでしょうが、わたしほどそれが当たっている人は、おそらくいませんわ。わたしはジェインよりも仕合せです。ジェインはただ微笑するだけですわ、わたしは笑うのですわ。」⁽⁷⁾ と手紙を書く。何事も ‘smile’

(5) *Ibid.*, p.31.

(6) ...she looked forward with delight to the time when they should be removed from society so little pleasing to either, to all the comfort and elegance of their family party at Pemberley. (p.392.)

で終るジェインとは違って、エリザベスの 'laugh' には力強い表現がある。即ち、ビングリーとの結婚で世界一幸せだと信じているジェインよりも、自分はダーシーと結ばれることでもっと幸福になるのだという力強い確信である。この 'laugh' と 'smile' は他の人物によっても言及されており、二人の性格を区別する言葉として注目に値する。たとえば、ダーシーは「ジェインが美しいことは認めるけれども、ほほえみすぎる。」“Miss Bennet he acknowledged to be pretty, but she smiled too much.” (p.64.) と述べている。又、ガードナー夫人は、エリザベスからビングリーの音信不通がいかにかにジェインの心を傷つけているかを聞かされた時、「かわいそうなジェイン。だってあの人の気質では、ちょっとすぐには忘れられないものねえ。リジー、いっそのこと、あなたならもっとよかったんだわ。あなたなら、すぐに笑い飛ばしてしまうだろうから。」⁽⁸⁾ と言って、エリザベスの性格を 'laugh' で表現している。確かに、エリザベスには最悪の場合にも笑い、又は笑い飛ばすほどの余裕がある。実際、小説の終りでエリザベスのダーシーへの愛を頭から信じようとする父に対して、いかに自分の気持ちを説明すべきか困惑した彼女は、一番泣きたい時に笑うのである。

To this question his daughter replied only with a laugh;...
It was necessary to laugh, when she would rather have
cried. (p.373.)

要するに 'smile' が「慎しい」、「消極的」、「従順な」、「遠慮深い」、「静的」と定義されるならば、'laugh' は「はつらつとした」、「積極的」、「表現的」、「動的」、「活動的」と定義できよう。

-
- (7) I am the happiest creature in the world. Perhaps other people have said so before, but not one with such justice. I am happier even than Jane; she only smiles, I laugh. (p.390.)
- (8) Poor Jane! I am sorry for her, because, with her disposition, she may not get over it immediately. It had better have happened to you, Lizzy; you would have laughed yourself out of it sooner. (p.179.)

V

さて、我々はジェインとの比較によってエリザベスの魅力を探ってきたが、恋人のダーシーは彼女の魅力をどのように述べているであろうか。

“...did you admire me for my impertinence?”

“For the liveliness of your mind, I did.”

“You may as well call it impertinence at once. It was very little less. The fact is, that you were sick of civility, of deference, of officious attention. You were disgusted with the women who were always speaking and looking, and thinking for your approbation alone. I roused, and interested you, because I was so unlike them.” (p.388.)

上述のエリザベスの代弁によれば、ダーシーは、いつも男性を意識して行動する普通の女性、たとえばその典型とも言えるミス・ビングリーのような女性にはあきあきしていたのである。従って彼が初めてエリザベスの「はつらつとした精神」“the liveliness of your mind”に触れた時、それは彼にとって抗し難い魅力になるのである。我々はI—IIでエリザベスの‘external criticism’と‘internal criticism’の統合、又、複雑な人間としての彼女の魅力、‘laugh’に表現されるダイナミックな性格を見てきたが、ダーシーの言う彼女の「はつらつとした精神」こそ、これらの魅力的な性格を生み出した母体になっているのではなからうか。この「はつらつとした精神」は、彼女をしてダーシーの最初の結婚申し込みを拒否させ、彼の「高慢」“pride”や「自惚れ」“conceit”などを指摘させるし、又、富や地位ゆえに尊敬されるダーシーの叔母のキャサリン夫人に対しても、夫人がダーシーとの結婚について干渉しようとした時に、断固としてその干渉を退けるのである。厳重な社会身分の差があった当時の英国社会の中で、このエリザベスの「はつらつとした精神」は、彼女の親類の身分の低さ（エリザベスの叔父たちは弁護士や商人であり、これらの職業は当時、軽

んじられていた。) などの制約にもかかわらず、彼女に生き生きとした自由な言動をとらせている。この彼女の生き方は、当時としては実に新鮮で、時流を抜いたものと言えよう。